提案主題	学校と家庭が連携した取組はどう進めたらよいか
サブテーマ	～ノーメディアとふれあい読書リレーの取組を通して～
協議の柱	学校と家庭が連携した取組は、教頭としてどのように進めたらよいか

提言者 大分市立横瀬西小学校 和田 巧

1 質 疑

- (1) Q 始めた頃のいきさつを聞きたい。苦労はなかったか。
A 学校経営計画の中身をうまく進めていくのが教頭の役割と考えるが悩みどころでもあった。無理のない形を選び、職員に理解と協力を得られるようにしていった。
- (2) Q 昨年の取組から日常生活に変化が見られたか。
A 取組を続けようという家庭もある。生活を変えるということではなく、生活の見直しのきっかけになれば、という思いで取り組んできた。

2 協 議

- (1) ・子どもの現状を的確に捉え、課題を明確にすることが必要。学校の思いを家庭に伝えることが難しく、さらに学校規模が大きくなると保護者のつながりが希薄になるが、そこを埋めていくのが教頭の役割。
・中学校でのSNSの扱いでは、学校単独ではうまくいかず、市全体で取り組むようにした。小中で連携した取り組みを進めることも必要。
- (2) ・目標共同達成の視点から地域人材の活用を小中の教頭が連携し年間通して行っている。
・コミュニティースクールを取り組むにあたって、学校運営協議会で協議する中で「地域に何をしてほしいか」を明確にしながら、協力していただいている。
・学力が定着しないという課題に対して、期末PTAの前に週に21時間以上の家庭学習の取り組みを保護者の協力を得て行った。学習意欲が高まり、今後も継続していく。
- (3) ・PTAが中心になって「家学」のすすめに取り組んでいる。読書、手伝い、ノーメディアなど好きなコースを選択。PTA3役が原案をつくり、教頭と相談して配付。集計もPTAが行っている。教頭はPTAとの連携と、地域での会議の中で学校と家庭が協同で取り組んでいることをアピールする役割を担っている。
・「ノー」メディアにすることではなく、自主的自律的行動をとれる力を育てる必要がある。

3 指導助言

主題設定の理由に、地域・保護者は協力的だが学習支援を必要とする児童が多いとあるが、学校として要因を分析する必要がある。保護者の抱える苦しさを知り、数値目標を設定する場合、教員だけのものさしになっていないか、保護者の思いとずれはないか振り返る。やらされ感ではなく、必要性を感じ本気にさせていくところに教頭の出番がある。同じ取り組みをするのに抵抗を感じる保護者がいるかもしれないことにも配慮する必要がある。

横瀬西小の素敵なところは、一律ではなく少し頑張ればできるコースを選択して取り組むところ。取り組みの結果、生活リズムの変容にどうつながったのか生の声を発信し、保護者を刺激するのも教頭の役割と言える。

具現化するために教職員間の気持ちあわせはできているか。担任が校長の思い、取り組みの意義を十分に認識して保護者に返しているか、教員間で共通理解を図る際の力を教頭に発揮してほしい。

学校と保護者・地域をつないでいくのは「心の絆づくり」。学校から情報発信を行い、保護者・地域のニーズを把握する。キーワードは「学校に招く」「地域に出かける」。